View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by DWCLA Academic Repository

同志社女子大学生活科学　*Vol*. 52，31～38（2018）

≪研究ノート≫

南丹市美山地区におけるエコツーリズムの現状と課題

Current situation and issues of The Miyama Ecotourism in Nantan City

齋　藤　朱　未　　中　井　悠　加*
（Akemi SAITO）　（Yuka NAKAI）

Abstract：Ecotourism is a travel system carried out for the purpose of environmental preservation, environmental education, economic promotion, and tourism promotion. What is indispensable for ecotourism is "Eco Tour". Ecotour is a tour conducted by the definition of ecotourism, accompanied by a guide to explain the nature, culture, history etc. appropriately during the course. The eco tour guide, has roles of promoting environmental conservation education, grasping current condition of the tour target area, and being a successor as maintenance and management. In 2007 the Ecotourism Promotion Act was established in Japan and in 2014 the Nantan City Miyama Ecotourism Council was designated as the sixth ecotourism promotion organization in the country. This study was discussed about the current situation and problems in Miyama ecotourism and Advanced land of eco-tourism and challenges in the future of eco-tourism promotion.

Key words：Ecotourism, Ecotour, Ecotour guide, Miyama in Nantan city

Ⅰ　研究目的

エコツーリズムは環境保全，環境教育，経済の振興，観光振興を目的にして行われる環境省が促進する旅行系体である。過疎や少子高齢化によって衰退しつつある地方の活性化手段として，多くの地方自治体がエコツーリズムに乗り出すようになった[1)]。しかし，過疎などの人手が乏しいという問題が地域にありながら，エコツーリズムは十分に促進できるのだろうか。その場合は，どのようにエコツーリズムを推進しているのだろうか。またエコツーリズム推進にあたり，どのような課題を抱えているのだろうか。これらについては明らかになっているとは言い切れない。

そこで，本研究はエコツーリズムにおける現状と課題を事例により把握することで，エコツーリズムが抱える課題を浮き彫りにし，どのような点に配慮すべきなのかを検討していく。これにより今後エコツーリズム推進を考える地域において，その過程でどのような課題が生じうるのか，今後のエコツーリズム推進に有意義な情報になりうると考える。

まず，エコツーリズム推進の現状としてどのような課題が明らかになっているのかを先行研究から整理することとした。そのうえで，事例分析として京都府南丹市美山地区を選定し，美山地区のエコツーリズムを担う南丹市美山エコツーリズム協議会会長の中川幸雄氏，自然文化村支配人・事業部事業推進課課長の大野琢馬氏に対し2017年11月に聞き取り調査を行った。本聞き取り調査により，南丹市美山地区におけるエコツーリズムの現状を把握した。

調査は美山地区のエコツーリズムの現状把握とともに，美山地区においてエコツーリズム設立過程やその推

同志社女子大学生活科学部
*大林道路（株）

進状況，それにおける課題等についても把握した。設立過程に関しては，エコツーリズム推進協議会の観点から設立から現状までに携わっておられる中川氏にうかがった。また，エコツーリズム推進にあたり，その定義に基づいて実際の参加形態となっている「エコツアー」を行い，地元住民が運営に関与している団体として推進協議会と自然文化村を選定した。大野氏には自然文化村における実践的な面での現状と課題についてうかがった。

Ⅱ　先行研究によるエコツーリズムの概況と課題

日本のエコツーリズムは環境省が 1990 年に「熱帯地域生態系保全に関する取り組み」の中でエコツーリズムを提唱したことがはじまりとされ，屋久島，八丈島，知床，奥日光，立山を対象にエコツーリズム推進方策検討調査が開始された[2)]。日本が 1992 年 12 月に世界遺産条約に加盟し，翌年に白神山地と屋久島が世界文化遺産として登録された。エコツーリズムにおいては，「エコツアー」が実際の参加形態となっており，ツアーガイドが同行し，コース中に適宜自然・文化・歴史等の説明を行う。ツアーガイドの役割としては環境教育やツアー対象地の現状把握，維持管理の担い手としての可能性が指摘されている。現在の日本におけるエコツーリズムは，NPO 法人日本エコツーリズム協会が中心となって活動しており，エコツーリズムの啓発と健全な推進をはかるため，エコツーリズムに関する情報提供や人材の育成などを行っている[3)]。

2007 年にエコツーリズム推進法が日本で成立し，法に基づき「エコツーリズム推進協議会」が設置された。エコツーリズム推進協議会により，地域住民，事業者，NPO 法人等との役割分担の下で，エコツーリズムを適切かつ効果的に推進する基本的枠組みを示したものが「エコツーリズム全体構想」である。各自治体が環境省にエコツーリズム推進全体構想の認定に係る申請書を提出し，エコツーリズム全体構想が適合と判断された場合，エコツーリズム推進法認定団体として認定される。環境省は 2009 年にエコツーリズム推進法認定団体として，第 1 号に埼玉県飯能市の飯能市エコツーリズム推進協議会を認定した。2009 年から 2017 年までに 12 地域のエコツーリズム全体構想が認定されている（表 1）。

先行研究を基にエコツーリズムが抱えている課題について整理した。その結果「エコツアー」,「エコツアーガイド」,「エコツーリズムの推進と啓発活動」の 3 点が課題としてあげられており，それぞれの課題についてみていく。

表 1　エコツーリズム推進法認定団体

認定時期	認定地域	認定団体
2009 年	埼玉県飯能市	飯能市エコツーリズム推進協議会
2012 年	沖縄県渡嘉敷村，座間味村	渡嘉敷村エコツーリズム推進協議会及び座間味村エコツーリズム推進協議会
	群馬県みなかみ町	谷川岳エコツーリズム推進協議会
2014 年	三重県鳥羽市	鳥羽市エコツーリズム推進協議会
	三重県名張市	名張市エコツーリズム推進協議会
	京都府南丹市	南丹市美山エコツーリズム推進協議会
2016 年	東京都小笠原村	小笠原エコツーリズム推進協議会
	北海道弟子屈町	てしかがえこまち推進協議会
2017 年	鹿児島県奄美市，奄美群島	奄美群島エコツーリズム推進協議会
	宮崎県串間市	串間エコツーリズム推進協議会
	愛媛県西条市久万高原町	愛媛県石鎚山系エコツーリズム推進協議会
	富山県上市町	上市まちのわ推進協議会

注）環境省 HP を基に筆者らが作成

1　エコツアーに関する課題

奥田[4)]が西表島で行った調査では，新たなツアーを行うにはコースの新規利用やコースの利用面積の拡大を図る可能性が高いことが示されている。さらに海津・真板[5)]によると，西表島では実際に植生の変化や川への飛び込みによる水の振動の影響で，以前生息していた生物が姿を消したという報告もある。このような影響を防ぐためにも，1 事業者当たりの 1 日の入域者数の制限や実地モニタリングを継続的に行う必要があることが述べられている。

また，海津・真板[5)]によると，西表島ではエコツアーでの利用エリアが重複する事によってツアーの価格競争が始まっており，無理なツアープログラムから海上で参加者が行方不明になるなどの事故が発生していることを指摘している。このことはエコツアーを実施する協会のみならず島全体のイメージダウンにつながることから，旅行業者全体の質をどう向上させるかという課題に直面

しているとのことであった。

2　エコツアーガイドに関する課題

エコツアーガイドに関しては，ガイドの収入面について山田・松井・大山[6]がエコツーリズム全体構想の認定を受けている三重県鳥羽市でエコツアー関係者 50 人に対し質問紙によるアンケート調査を行っている。その結果，エコツアー業務を開始したきっかけとして，収入増加を期待したと回答した人は 16% であり，エコツアーの将来性，地域の人々のつながり，地域環境の向上，地域活性化といった項目を動機としている人が 60% 以上みられた。また，エコツアー業務を継続している理由に対しては，現在の状況に「満足している」傾向にある人が 18% であった。このことから，エコツアーガイドを行うに当たりその将来性や地域への貢献といった面に期待しており，報酬はあまり重視されておらず，報酬が低くても業務を続ける割合が高いことがうかがえた。そして報酬以外の理由が充実していれば，エコツアーガイドの業務に満足している傾向にあるということがうかがえた。

また，大澤[7]が和歌山県の熊野古道やその周辺地域のエコツアーガイドの収入の有無に関する意識調査行っている。大澤によると，収入が得られることによってツアーガイドが熊野古道への来訪者拡大に積極的に関わろうという動きがあること，地域内に一定の経済効果をもたらすこと，地域の環境・文化や誇りを保全する活動にガイドが積極的に関わる機会が増えたという意識変化がみられたことを明らかにしている。しかし，ガイドの報酬については，いずれの事例でも生計を立てる事が出来るほどの収入には至っておらず，一つの仕事として成り立っているとは言い難い。

また，武・斎藤[8]はエコツーリズムにおけるガイドの役割と環境保全の関係把握を目的として研究を行っており，ガイドが「環境保全」と「地域振興」に比べ，「顧客サービス」に比重を置いていることが明らかになった。顧客サービスと環境保全が直結しない場合があることから，ガイドは環境保全の役割をきちんと認識しなければならないことを指摘している。ガイドの質に関して，海津・真板[5]によると，屋久島ではガイドの数が増加し，エコツーリズムの本質やルールを理解せず地域住民とトラブルになる，ガイドにおいても知識が乏しいままツアーを行っているという問題が生じていた。その問題を解決するため，2016 年から屋久島では「屋久島公認ガイド」という認定制度を構築している。この制度は「屋久島公認ガイド」,「認定ガイド」,「登録ガイド」の三段階で登録される[9]。屋久島公認ガイドになるためには様々な規定を満たさなければならないが，基準が決められるという事でツアーガイドの質が安定し，地域住民とのトラブルも減少すると期待されている。

3　エコツーリズムの推進と啓発活動に関する課題

地域住民のエコツーリズムの普及と啓発活動に関して，西表島では，エコツーリズムの考え方を広く普及するために，地域の中学校のエコツアー体験学習のガイドを体験してもらうことや，学校でエコツアーの講演会を実施するなど，島民対象の各種協力を行っている[5]。エコツーリズムに携わる地域や住民との経済格差や風紀等の問題が起こっているとして，活動を非難，協力の拒否という事態が発生した。そのために西表島エコツーリズム協会では活動利益の一部を村民に還元し，より広範な支持を村民から得るために，協会主催の西表島文化祭の開催による村民との交流会の実施，ポストカードの作成と売り上げの一部を自然保護活動に還元するための基金の準備を行っている。また，地域自治活動への日常的参加なども進めている。

Ⅲ　美山地区の概要とエコツーリズムの推進

1　美山地区の概要

京都府南丹市は 2006 年 1 月，京都府船井郡の園部町八木町・日吉町・北桑田郡美山町が合併し発足した。南丹市は京都府の中央部に位置し，総面積が 616.31 km^2 である。これは京都府の 13.4% を占め，京都市に次ぐ広さである。市域の 88% の約 540 km^2 を山林が占め，若狭湾に注ぐ由良川と中部を大阪湾に注ぐ桂川が横断，縦断している[10]。南丹市の人口は 32,094 人（2018 年 10 月 1 日現在）である[11]。

その中の美山地区は南丹市の北東部に位置しており，面積は 370.47 km^2，町域の中心部を東から西へと横断する由良川の本流と支流沿いに 57 の集落が散在する中山間農村地帯である。2008 年度に策定された南丹市総合振興計画では，美山地区はふれあいの森ゾーンとして街づくりが進められている。ここでは豊かな自然環境やかやぶき民家群などの地域資源を保全し活かしながら，地域おこしを推進し，グリーンツーリズムや都市からの移住促進を図ること，住民主体による農産物加工販売を進めて自然とのふれあい豊かな地域整備を進める事を目的としている。

自然環境に関しては，美山地区東部に位置する三国岳

山麓の由良川の水源地帯に 4,200 ha の京都大学芦生研究林が広がっている。芦生研究林は，太平洋側と日本海側に分布する植物が混生し，植生が豊富であるため，自然愛好家や登山愛好家などの入山者が多い。

地区の暮らしにおける問題点としては，1955 年には 10,000 人を超えていた人口が 2017 年 11 月 30 日の時点で人口が 3,913 人と減少の一途を辿っていることがあげられる。2017 年 4 月 1 日現在で美山町の平均年齢が 56.8 歳であり，65 歳以上の人口が 45.54% と高齢化していることに加え，毎年人口が約 100 人減少し，過疎の問題も抱えている。そのような情況の中で芦生の松上げ，盛郷・殿・川合の上げ松，川合のキツネ狩り，樫原のからす田楽，田歌の祇園神楽など，数百年続く伝統的なお祭りが受け継がれている。なお，かやぶきの里は国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている[10]。

2　美山地区におけるエコツーリズム推進

(1) 美山地区におけるエコツーリズム推進経緯

美山地区は過疎，少子高齢化等の地方自治体が抱えている典型的な問題を有している地区である。このような状況に対し，美山地区のエコツーリズム推進団体がエコツーリズムによる新たな観光形態によって，地域の経済やまちづくり貢献に取り組むため，エコツーリズムの先進地である滋賀県高島市，長野県飯田市，京都府宮津市に視察を行った。これをうけて，2010 年 6 月には「南丹市美山エコツーリズム推進協議会」が発足した。また，全体構想認定に向けて 2010 年当時に唯一全体構想が認定されていた埼玉県飯能市を訪れ，全体構想策定を行うにあたって各地区の有識者で構成された「観光資源発掘委員会」を発足した。

2011 年には「エコツーリズム全体構想原案」を南丹市に提出し，市が確認の後，京都府・環境省近畿地方環境事務所に提出した。

そして京都府環境保全課の指導も受け，2013 年 12 月に全体構想原案を環境省に提出，2014 年に南丹市美山エコツーリズム協議会が国内で 6 番目のエコツーリズム推進実践団体として認定された[10]。

現在，美山地区のエコツーリズムは南丹市エコツーリズム推進協議会として 30 団体（組織）の会員を擁しながら推進されている。

(2) 南丹市エコツーリズム推進協議会

南丹市エコツーリズム推進協議会は地域の伝統文化と豊かな自然を生かしたまちづくり・地域活性化を目的として 2010 年に設立された。美山町の振興会をはじめとする住民組織，美山町観光協会などの観光事業者，NPO 法人，京都大学，行政が協議会の構成員となり，地域の財産区管理委員会がアドバイザーとなっているエコツーリズム推進団体である[11]。

(3) 美山町自然文化村

美山町自然文化村は 1989 年に設立され，2014 年 4 月に美山町文化村と美山ふるさと株式会社が統合し新生「美山ふるさと株式会社」が発足・始動した。美山ふるさと株式会社には 4 つの部署があり，総務部・地域振興部・マーケティング部・自然文化村事業部に分けられている。エコツーリズム推進のためのエコツアーを南丹市美山エコツーリズム協議会と連携し造成，企画，実施を行っている。美山町自然文化村ではエコツーリズムを推進し，地域の雇用の拡大，地域と都市部の人が交流し観光業を成立させて地域活性化につなげること，過疎化対策として移住者を増やすことを目的として取り組んでいる。

Ⅳ　美山地区におけるエコツーリズムの現状と課題

聞き取り調査で得た情報をもとに，美山エコツーリズムの現状を「エコツアー」「エコツアーガイド」「エコツーリズムの推進と啓発活動」の 3 点から整理するとともに，各組織が抱える課題について整理する。

1　南丹市美山エコツーリズム推進協議会の現状と課題

(1) エコツアーについて

南丹市美山エコツーリズム推進協議会は地域文化や歴史遺産などと多彩な自然・景観を組み合わせたプログラムを開発し，住民の意識と意欲を高めながら住民参加型のエコツーリズムを推進することを目的としている。そのため，地元の文化体験ツアーのほとんどは，地元住民がツアーの提案をし，エコツーリズム推進協議会はツアー実現化の手助けを行なっている。そして，年に一度開催されるエコツーリズムに携わる人，興味がある人が参加するエコツーリズム大会でその提案ツアーを行い，アドバイスや感想を頂くことでツアーに対する自信をつけてもらうというかたちをとっている。

エコツーリズムの活動を知ってもらうためにパンフレットや広報誌などを配布している。また，住民一人一人が地域の語り部となって個性あふれる案内をするため，地域の宝を共有する「美山語り部講座」の実施や，ゲストスピーカーが美山地区各地のエコツーリズムの活動を紹介し，美山の人々がお茶を交えつつ交流し，美山地区を好きになってもらう「エコツアーカフェ」なども開催

している。これらのことから，美山エコツーリズム協議会ではエコツアーに関して現在目立った課題は生じていない。

さらに，エコツーリズム全体構想は専門家が作成している地域も多いが，南丹市美山エコツーリズム全体構想は，専門家に加え地域住民が協力して作成している。これにより，地域住民はより美山地区の歴史や文化への理解を深め，地域の魅力について考えるきっかけとなっている。そして，エコツーリズムを推進するにあたり，住民の理解や協力が得られやすい状況を生んでいる。

(2) エコツアーガイドについて

エコツアーに大切なものはガイドの質である。ツアーに参加した参加者に，美山の自然や文化の素晴らしさを知ってもらえるガイドを行わなければならない。ガイドの質を高めるために，エコツアー実施団体が互いに研修を行なっているとのことであった。芦生研究林で新たなコースが開かれた時は，実施団体全員でコースを確認し，改めてエコツーリズムやエコツアーの本質を理解するように心がけているとのことである。また，ガイドだけではなく参加者を指導する，参加者に学んでもらうということもエコツアーガイドに必要なスキルであり，その育成にも力をいれている。

(3) エコツーリズムの推進と啓発活動について

芦生研究林が国定公園に指定されたことで，新たな旅行形態の構築も検討している。国定公園の指定は，通常その地域からの要請によって検討，登録されることがほとんどだが，芦生研究林は国からの直接要請であった。これは美山地区でのエコツーリズムの取り組みが評価され，国定公園の指定に繋がったものである。美山町全域が国定公園に指定されたという理由で観光客が増えるとは思っていないものの，それを活用して美山地区の文化と自然に関わることが出来る旅行形態をつくっていきたいと中川氏は考えている。

(4) 南丹市美山エコツーリズム推進協議会の課題

南丹市美山エコツーリズム推進協議会がエコツーリズムの推進にあたり課題としていることとして，『ガイドの養成』，『ツアーの創造』，『エコツーリズム大会の実施』の 3 点があげられた。

今後のエコツーリズムの推進において，かやぶき民家の景観を見て楽しんでもらうだけでは地域の経済効果は見出せず，地域活性化に繋がらないと考える。そのため，美山地区に滞在してもらえるようなツアーの創造を必要とするが，そのためには新たな見所の発掘などに取り組んでいく必要がある。新たなツアーの創造にあたっては，外国人旅行者に対応した取り組みが検討されている。

以前は兵庫県や大阪府からの観光客が多くみられたが，京都駅からの送迎バスの運行を始めたことで，京都市内からの観光客も増えている。そのため，現在の美山地区は日本人観光客の増加がみられるが，景色を楽しんだら帰る観光客が多いため，観光による地域への利益が少ないのが実情である。外国人旅行者の増加もみられる。台湾人観光客が美山地区に宿泊した際，その時の体験内容等が口コミで広がったことで台湾人観光客が増加している。近年は美山エコツーリズム協議会と自然文化村の職員達が台湾やタイの旅行会社，学校にツアーの営業等を行っている。その影響もあり，日本の学校以外にも台湾の子供たちが農業体験として美山地区に宿泊する機会も増加している。これらのことから，今後も外国人旅行者の割合は高くなると中川氏は考えており，この機会に美山地区の魅力を伝えることができるツアーの創造を検討しているとのことであった。それとともに，外国人旅行者に対応できるガイドの養成も重要になってくることから，今後の課題といえる。

2　美山町自然文化村の現状と課題

(1) エコツアーについて

美山町自然文化村では芦生研究林ネイチャートレッキングツアーが主に開催されるエコツアーである。自然文化村発着のツアーが 7,560 円，京都駅から発着のツアーが 12,960 円である。4 km から 9 km の歩行距離と 4 時間から 6 時間の歩行時間の 5 つのコースが用意されている。その他にも，健脚者向けのトレッキングエコツアーや，1 月と 2 月限定で行われるスノーシューハイクツアー，インバウンドに対応する住民ふれあい型の文化体験ツアーがある。

エコツアー受入れに関しては，1 日にマイクロバス 2 台分の 50 人をツアーに集客することが可能であるが，1 ツアーの最大人数はツアー 1 回当たり 25 人としている。

ツアーには，旅行会社からツアーの造成を依頼され実施されるエコツアーのほかに，教育旅行，自然文化村河鹿荘の宿泊者向けガイド，一般客向けのインターネットで募集されるツアーなど多様である。ハイシーズンは新緑シーズンの 5 月と紅葉シーズンの 11 月であり，その頃は 1 日に 2 回ガイドを行う事もある。国定公園に指定されたことにより他の地域の自然も見所となり，その自然を利用したツアーも実施されている。

(2) エコツアーガイドについて

美山町自然文化村の常任トレッキングツアーガイドは男性・女性各2名であり，4名全員が50歳代～70歳代である。大学教授，海外でエコツアーガイドを経験した方など，多様な方がツアーガイドを行なっているが，仕事を退職した後にガイドの仕事に就くなど，ガイドの収入のみで生活しているという人はいない。そして全員が美山地区出身ではないが，美山地区に定住しツアーガイドを行っている。

ガイドは第一に安全管理の徹底，第二にお客様を満足させることをしなければならない。そのため，芦生研究林のトレッキングツアーのようにリピート率が3割程あるものに対しては，毎回同じ内容のツアーとならないよう，ガイド自身が持つ知識を100％発揮しないように心掛けている。専門知識が豊富なツアーガイドも自分の専門外の知識を学ばなければならない。特に，芦生研究林の場合は毎年多くの論文が発表されるため，その都度発表論文を読み，自分の知識として蓄えている。

また，ツアー参加者に対しては芦生研究林が京都大学の研究林であることから研究対象物を壊さないことやツアー参加者個人でできる安全管理や装備などを説明し，それらに理解を得てからツアーを行っている。トレッキングエコツアーは5種類のコースがあるため，10日間ツアーを行っていないコースがある場合は，自然環境の変化を日報で確認を行うなどで対応している。ツアー参加者の年齢，体調などによってもコースを変更するなど，柔軟な対応が必要である。天候悪化，風による落枝の危険性があればガイドの一任でコースの変更やツアーの続行もしくは中止など，判断スキルも必要になってくる。ケガ，死亡事故が発生すると信頼もなくなってしまうため，ツアーが実施できなくなる。そのため，それらの要因は出来るだけ排除し，ツアーに参加してもらうようにしている。

芦生研究林のトレッキングツアーをはじめ，全てのツアーはガイド2人が同行しなければならない。ガイドの指示が異なるとツアー客がどちらの指示に従えば良いか混乱するため，ガイド同士の協調性を大切にしている。毎日ミーティングをして意見交換を行うことや，ツアー終了後に必ず日報を書くことで，ガイド同士の情報交換と共有を行っている。お客様の満足度を高めるために，何が求められているのかのリサーチ，ターゲット層をツアー終了時のアンケートで調査している。近年は芦生研究林トレッキングツアーだけではなく，新たなツアーも増えており，ネイチャーガイドとしての仕事も増えてきている。

また毎年3千人を集客するためには，ガイドの力量も関わることから，ガイド育成には力を入れており，しっかり研修を行ってからガイドの資格を与えるようにしている。ガイドは研修を経るとガイドとして働くことが出来るが，その研修期間などは個人のスキルや知識量によって前後させている。ツアーに同行してどのようなガイドを行えばよいか学び，勉強する時間が必要である。山岳ガイド，救急救命などのマニュアルはもちろんあるが，それらは出来て当然の事とされ，それ以上のスキルを求められている。ツアーである以上参加者を満足させなければならないことから，人間性もツアーガイドになるための重要な要素としている。

(3) エコツーリズムの推進と啓発活動について

今後の推進に向けては，現在増加しているインバウンドについて，自然文化村では主に文化体験の対応を行なっている。しかし，持続的な展開を検討すると，ネイチャートレッキングツアーのインバウンド対応も考える必要があり，これらへの対応が求められる。

(4) 美山自然文化村の課題

先のインバウンド対応については，その必要性を認識している。しかし，需要の有無が明確ではなく，ガイド教育も難しいことから，具体的な対応ができていない。そのため，まずはどの程度の需要があるのか，マーケット調査を行う必要性に立たされている。

また，エコツアーにはハイシーズンとオフシーズンがあるためガイドにとって収入の波が出来てしまうことがあげられている。さらに，ツアーガイドだけで生計を立てることが難しいことに加え，ガイド研修期間が長いため，若い人がツアーガイドを始めにくいという事が課題としてあげられている。

そして，美山地区のエコツーリズム自体の問題として，地区の中でもエコツーリズムによる恩恵を受けているのは主だった観光資源がある地域のみであるとの見方があり，そのことも課題としてあげられていた。

Ⅴ　美山地区のエコツーリズム推進に向けて

今後の美山地区のエコツーリズム推進にあたり，課題としてあげられている内容について，先行研究をもとにその対応を検討していく。

1　エコツアーに関して

美山エコツアーの推進においては，エコツアーの新たな顧客，リピーターを増やすことが必要とされている。

新たな顧客確保においてはインバウンドに対応するなどもあるが，リピーターへの対応も検討することが必要なことから，ツアー自体の新規性が求められる。新たなツアーを創造する際に気を付けなければならないことは自然環境への負荷である。美山地区は地区全域が国定公園に指定されたことにより，芦生研究林以外で行われる新たなツアーの造成が進んでいる。そのため，以前は入林が想定されていなかった地域に人が入ることで生態系に影響を及ぼす可能性がある。国定公園に指定され，自然環境を守るべきはずがエコツアーによって保全ができなくなることは避けなければならない。それを防ぐためには，ツアー参加客にそのような状況を理解してもらうパンフレット等を作成しツアー時に配布する事も考えられる。また，芦生研究林では入林区域を定める，1日の入林人数を定めるといった取り組みを行なっている。このような環境の負荷を減らすための方法を考慮したエコツアー創造が今後必要であると考える。

2　エコツアーガイドに関して

エコツアーガイドの課題に関して，ガイドで生計を立てようとする人はうかがえなかった。このことから，美山地区の自然に魅力を感じツアーガイドになった傾向にあると考えられ，その場合は収入が低くても現在のガイドという業務に満足していると考えられる。しかし，新たな顧客の確保や活動の持続性を考えると，ガイドの若年化の必要性は否定できない。そのためには，ガイド収入である程度の生活が保障できることが必要と考える。

ガイドのみの収入で生活が出来るようになるとツアーガイドの職に就きたいという人が増える可能性もあるが，エコツアーガイドになるためには研修期間が長く，特に若い世代では貯金などがなければ始めにくいと考えられる。よって，研修期間においても経済的な支援を行なうことや研修期間の短縮が可能となれば，若い世代にもガイドを志す人が増える可能性がある。その一方で，研修期間の短縮はガイドの質が低下する恐れがある。そのため，屋久島のようにツアーガイドの登録制度を設けるなど，段階を踏んだガイド育成等の検討も必要と考える。その際には，美山エコツアーガイドのやりがいや魅力を十分に伝えることで，ガイド研修中のモチベーションの確保も大切であると考える。

さらに，拡大するエコツアーに対応して，ガイドが顧客サービス重視に偏り，本来の自然環境保全等への意識が希薄化することがないよう，環境日報やミーティング等で環境保全に関する事も取り上げるなど，ガイド同士で環境保全の意識を高めていくことも必要と考える。

3　今後のエコツーリズム推進と啓発に関して

今後のエコツーリズム推進のためには，美山地区全体がその推進意識を有していることが望まれる。その一方で，美山地区全体にエコツーリズムの経済振興が行われていないことが問題となっている。この課題に関しては，地区の中でも観光資源が多い北村地区以外の地域にインバウンドの民宿を建設し，地区全体でエコツーリズムに取り組むことが考えられていることから，今後，特定の地域にのみ利益があるという状態が改善されていく可能性がある。

南丹市美山エコツーリズム推進協議会，美山町自然文化村の両組織とも地域の行事には積極的に参加し，住民との信頼関係を築く努力を行っている。地域住民との信頼関係が生まれる事は，地域の歴史，文化，自然資源の新たな発見や発掘を行う際に地域住民の協力を得やすくなるため，その関係性の持続は重要な要素となってくる。また，他事例にあるように地域の学校でエコツアー体験やエコツーリズムに関する講演会を行う事でエコツーリズムに対する理解が深まり，協力してくれる人が増えると考えられる。美山エコツーリズムに携わりたいと考える人を増やし，エコツアーガイドが一仕事として成り立つことは，美山地区の人口流出を防ぐ可能性があり，エコツーリズムの推進はその地域資源の持続的な維持管理へとつながる可能性もある。

Ⅵ　まとめ

美山地区におけるエコツーリズムの推進に向けて，その現状と課題について整理した。

エコツーリズムの推進においては，その取組みを地域住民に知ってもらうイベントの開催，広報誌の配布でエコツーリズムを身近に感じてもらう取組みを行っている事が明らかになった。しかし，美山地区のなかでも観光資源が少ない地域ではエコツーリズムによる経済の振興が得られておらず，今後のエコツーリズム推進において，対応が必要な地域の存在が明らかとなった。

また，エコツアーガイドに関しては聞き取り調査を行った2組織から多くの課題が挙げられ，先行研究でも多くの課題がみられた。エコツーリズムを行う上でエコツアーガイドは，その善し悪しを決める大切な役割を担っている。そのため，エコツーリズムの推進を図っていく際には，多くの課題が生じやすいものと考える。そして，エコツアーガイドを持続的に確保するにあたって

は，収入面での配慮は必要不可欠である。ツアーガイドへのやりがいと収入を考慮することによって，エコツアーガイドを志す人を増やすことが必要と考えられる。

本研究において，エコツアーのインバウンド対応の必要性とそれに向けた課題があることが明らかになった。しかし，先行研究にはインバウンドに関する事例が無く，先行研究を基にした課題の解決法を考察することが出来なかった。訪日外国人が増加している日本ではエコツアーのインバウンド対応がエコツーリズムの更なる発展に大きく関わる一方で，インバウンドに関する課題も今後生じてくるものと考えられる。よって，今後の課題としてエコツアーのインバウンド対応については，早急に検討していく必要があるものと考える。

謝　　辞

本稿の作成にあたり，聞き取り調査にご協力頂いた南丹市美山エコツーリズム協議会の中川幸雄氏，自然文化村支配人・事業部事業推進課課長の大野琢馬氏のお二方に感謝申し上げます。

引用文献

1）平井純子（2013）：里地里山型エコツーリズムの現状と今後への一私案：飯能市を事例に，駿河台大学論叢（47），169-186.

2）深見聡（2011）：屋久島における環境保全とエコツーリズムの現状と課題，日本観光研究学会全国大会学術論文集　**26**, 425-428.

3）圓田浩二（2016）日本におけるエコツーリズムの観光社会学的分析：飯能地区・慶良間諸島・みなかみ町・知床半島・小笠原諸島を事例として，沖縄大学法経学部紀要（25）：55-67.

4）奥田夏樹（2007）：日本におけるエコツーリズムの現状と問題点－西表島におけるフィールド調査から－，地域研究　**3**, 83-116.

5）海津ゆりえ，真板昭夫（2001）：西表島におけるエコツーリズムの発展過程の史跡考察，国立民族学博物館調査報告（23），211-239.

6）山田二久次，大山翔子，松井隆宏（2016）：エコツアーの実施と地域の人々のつながり　－三重県鳥羽市を事例とした社会ネットワーク分析－，人間と環境　**42**(2)，5-17.

7）大澤健（2007）：世界遺産地域における語り部・ガイドの現状について，地域研究シリーズ　**32**, 1-23.

8）武正憲，斎藤馨（2011）：文献によるエコツーリズムにおけるガイドの役割と環境保全との関係把握，ランドスケープ研究　**74**(5)，531-536.

9）屋久島町エコツーリズム推進協議会（2015）屋久島ガイド登録認定制度検討部会　報告書，〈http://www.yakushima-eco.com/documents/kentoubukai-houkoku.pdf〉，2018 年 10 月 18 日参照.

10）南丹市美山エコツーリズム推進協議会（2014）：南丹市美山エコツーリズム推進全体構想.

11）南丹市役所ホームページ〈https://www.city.nantan.kyoto.jp/www/〉，2018. 10. 18 参照.

（2018 年10月19日受理
2018 年12月 7 日採択）